

八路軍になり一層食料事情が悪化し、重症患者でもコウリヤンのお粥だと聞いていたが、私達も少しでも満腹感を得たいため、収容所内の野草を食べては下痢をしたのが原因であったと思う。アスピリンの風邪薬や健胃錠もソ連軍に引き上げられて無く、下痢止めには「げんのしょうこ」が良いと言うので、探して陰干しをして飲むが一向に止まらなかった。そこで炊事場附近に捨てられた骨を焼いて骨粉を作って飲んだり、急ぐ時には焚火の炭を嚙っていた。

そんな毎日の中で、徳島の若い兵が下痢をしていると聞いていたが、私の留守の間に赤痢だと言って入院していた。間もなく死亡したと伝わってきて、早速見舞いに行けば良かったと悔やまれた。この若い兵の所へは以前兵曹長ではないかと思える人が直心棒を持ってよく尋ねて来ていた。この人達の中ではまだ戦争が終っていないのかと、いつも入って来る度に思っていたが、この人に続いて赤痢で死亡しただけに感染したのではな

いかと思う。

まだ若いだけに、可哀想であり、残念であったので、郷里の親に是非知らせてあげたいと思っていた。しかし、復員後あまりに多くの人達が、親、子、夫を尋ねて来られ、苦しかった戦後の説明に苦しんだ。そうして連絡後の遺族を思い、思案をしている内、大事に足に巻いて隠し持ち帰ったメモをなくしてしまった。

〔編注〕

田上建氏の手記(二)は、第XIII巻に掲載されています。

戦争を知らない兵隊

佐賀県 佐藤 義孝

私は佐賀市久保泉町川久保在住です。昭和十三(一九三八)年一月十日、久留米第四十八連隊第

二中隊に入隊しました。兵科は歩兵軽機関銃隊に所属し、軽機関銃を担いでの厳しい訓練の毎日でした。

そして来る日も来る日も叩かれ、男涙を流しながらも歯を食いしばり、一日も早く立派な兵隊にならねばと、一生懸命頑張りました。軍隊は男の世界、その厳しさは覚悟して入隊しましたが、九州男児の元気のよさを今更ながら思い知らされました。

やっと一期の検閲を受けた後、間もなくの昭和十三年四月一日、北満へ移動することを伝えられ、移動準備が開始されました。中隊ぐるみの移動ですから大騒動です。トラックに器材の積み込み、兵隊が乗車する。さすが軍隊ですね、その行動の速さ見事さに関心しながら博多港に向かいました。大きな輸送船が待ち受けていて、片っ端から船に積み込まれ、時を経ずして離岸し、玄界灘へと出発しました。

玄界灘の荒波は聞いておりましたが、揺れる揺

れる、船中では、あっちへごろごろ、こっちへごろごろと揺れて、三日二晩、船酔いで食事も取れず、その苦しさは話もできない位大変なものでした。やっと大連港に着いてほっと致しました。

大連港の埠頭に水揚げされた荷物は、次々と列車に積み込みがなされ、私たちを乗せた列車は、一路北へ向かって走り続けました。着いたところは牡丹江省石門子でした。

兵舎は立派でしたが、さすが北満州、寒いこと。広々たる雪景色に白樺の林でした。早速、防寒服に衣替えし、部隊名も満州第三十部隊として、石門子から城子溝へ移動、北満の警備に就くことになりました。早速、雪原の中での訓練が始まりました。

この地で、再び一期の検閲を受けることとなり、私たちは、二回一期の検閲を受ける羽目になりました。

食事は高粱の入った飯で、食べ物には不自由はありませんでしたが、栄養価が低く、空気が乾燥

しており、またために結核患者が増えてきました。

特に、部隊大演習が実施され、その激しさは多くの兵隊が落伍した程でした。そして三日間、食事は乾パンで、その上寒さです。人も馬も次々と倒れてゆきました。いま思い出しても無茶な大演習だったなあと、ぞつと致します。

私たちの中隊は、さらに奥地の淋しい街、薩陷子溝に駐屯し、ソ連軍の監視に勤務することになりました。

その兵舎は、アンペラで覆った三角兵舎で粗末な兵舎でした。五月二十日頃までは雪が降りますから、夜はすきま風が吹き込んで寝ることができませんでした。幸い白樺の木が林立していましたが、白樺の木の切り倒しと薪作りが仕事となりました。

白樺の木は、油を含んでおりますのでよく燃えました。これが唯一の暖房でした。夜も昼も燃やし続けました。

七月頃になりますと、雪も解け、美しい鈴蘭の

花が毛氈を敷き詰めたように咲き、素晴らしい春景色でした。

任務は黒龍江の対岸のソ連兵の行動を眼鏡で監視し、また部隊の射撃大会前には射撃訓練、銃剣術大会前には銃剣術の訓練をするなど、この頃は軍隊生活も比較的穏やかな日々でした。あの有名なノモンハン事件のあったことも全く知りませんでした。

この頃、夕方に、真っ赤な大きな夕日が西の地平線へ沈んでゆく美しさは、北満でなければ見ることはできません。

十月になれば、再び寒い冬將軍がやってきます。寒い日は零下二〇度を越す日も珍しくありませんでした。兵隊にとってはこの短い春と夏は楽しみになりました。

少し南下しますと開拓団の方々の開拓農地もありましたが、見学にゆくこともありませんでした。また、人口の少ない街に出ることもありませんでした。そして二回、慰問団が来てくれました

た。歌手の楠繁夫や美奴が来て、懐かしい日本の古い歌に涙を流し聞き入りました。

昭和十三年六月一日、一等兵に、さらに十二月には上等兵に進級、昭和十四年十一月、初めて兵長が新設され、その一番の兵長に進級しました。

石門子、城子溝には各兵科の兵隊も沢山おりました。師団司令部があつた関係で軍人の数も多く、賑やかでした。私たちの駐屯する場所は、陸の小島のような淋しい場所でした。それはあくまでもソ連軍を監視するのが任務ですから、淋しい場所でなければ任務を果たすことができないからです。

冬になると白樺の伐採と薪作り、貴重な燃料ですから毎日の仕事の一つです。石炭等は全くありませんし、白樺の木に頼らねばなりません。食事の栄養価の減少、室の中は煙もうもう、体にいい訳ありません。中隊長の小野少尉も、とても体格の立派な方でしたが、結核に感染され入院されました。次々と結核患者が入院していきました。空

気が乾燥していること、寒いためアンペラ兵舎に入ると、白樺燃料で室の空気は汚れていることが原因の一つであつたと思ひました。

便所の清掃にも困りました。凍っているため鉄棒で凍った小便所、大便所をとんとんと叩くと、その飛び散る氷片が顔に、服に飛び散つたのが解けて、臭くて便所清掃当番になることが一番困りました。

太平洋戦争の前でありましたため、住民も温順で、トラブル等もめつたにありませんでした。外出することもめつたにありませんでしたが、たま外出した兵隊に、「このごろ、慰安婦は料金は幾ら位するのか」と尋ねますと、「高いですよ、三円取ります」と答えるので、私が伍長で十五円の給料でしたから「安くないなあ」と言いながらも若者のはけ口がこれ以外にないので、慰安婦も安くないなあと笑つたことでした。

たまたま雪原の中で匍匐前進の訓練中、夏に切り倒した白樺の切り株で脚を切り裂き、入院する

ことになりました。意外と重傷で、三回手術が行なわれ、二カ月余入院生活を送りました。この入院生活もあってでしょうか、昭和十六年四月一日、兵役解除となり、多くの戦友と涙を流して別れ、大連行きの列車に乗せられました。

昭和十六年四月中旬、自宅に戻りましたところ、軍需工場に人が足りないために、日鉄八幡製鉄所に勤務することになりました。

戦争が激しくなるにつれ、軍需工場からも次々と召集され、入隊して行きました。私も今日か、明日かとお召しを待ちましたが、遂に八月十五日まで、召集令状は来ませんでした。工場での仕事が航空機の翼材料の圧延作業であったためかも知れません。

満州では戦争らしい経験はありませんでした。ここではB 29の空襲を二回受けました。幸い一回目は自宅におり、近くの防空壕に避難し難を逃げる事ができましたが、その物凄さ、工場をはじめ、近くの民家にバラバラと落ちてくる焼夷

弾の物凄い音、炸裂する度ごとに建物は吹き飛ばし、何の罪もない住民の逃げ惑う姿や多くの死傷者を見るにつけ、戦争の悲惨さを日本本土でつくづくと体験しました。

二回目は勤務中に空襲を受けました。B 29数機が波状的に工場を目標に爆弾の雨霰、工場は吹き飛びメラメラと燃える。わが方の高射砲の弾丸はB 29に届かず、邀撃する我が戦闘機も敵の機関砲で撃ち落とされるし、残念で身振るいするばかりでした。後で判明したことです。死者六十余人と聞かされ、戦争の恐ろしさを身に沁みて感じました。

昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が投下され、多数の死傷者が出るし、それでも私たちの仕事は破壊された工場内を片付けながらも、負けてはならじと一生懸命に頑張りました。

八月九日、今度は長崎に原子爆弾が投下され、莫大な被害を受けたとのニュースと共に、ソ連軍が満州に雪崩れ込んだとの報道に驚きました。石

門子の軍隊は、城子溝の軍隊はどうなつたろうか……。恐らくソ連軍と激戦をしているに違いない。南方に移動されたと聞いておりまじただけに、残された兵力では、とても太刀打ちはできないだろうと考えると夜もおちおち眠ることができませんでした。そして長年にわたり苦勞された開拓団の皆さんはどうされたであろうか。

僅か三年でありましたが、毎日叩かれながら、寒さに震えながらも過ごした北満警備のことが次々と思い出され、ソ連軍と戦っている日本軍のことが他人事のように思えず、どうぞ被害が軽微でありますようにと、祈らずにはおれませんでした。

日ソ不可侵条約を結びながら、一方的にこれを破棄し、満州に雪崩れ込んだソ連に対し、激しい憤りを感じました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まって以来、南方に中国に北辺にと、各地で敗戦を聞く度に、再び召集令状を頂戴し、軍人として御国の

ためにお役に立ちたいと毎日念願して、待ち受けていた自分が戦友たちに申し訳ない気持で、終戦の詔勅に涙を流しました。

戦争は二度とあつてはならない。五十七年前の悲劇を繰り返してはならないと深く心に刻んでおります。

昭和十四年四月二十九日（昔の天長節）に勲八等を受章しました。勲章を眺めながら、これを唯一の誇りとし、余生を世のため、人のために尽くす決意で毎日を過ごしております。

満ソ国境異常なし

福岡県 堤 繁 人

福岡県三瀧郡三瀧町に榮次を父とし、タネを母とし、大正八（一九一九）年に生まれた。男三人、女四人の七人兄弟の長男だったので、大塚尋常高等小学校を卒業後は家業の農業の手伝いをし